

HAWAIIAN ISLAND FOLK MUSIC OF THE '70S

text by YUKI"ALANI"YAMAUCHI

70年代は私にとって今に至る大事なエッセンスの吸収、蓄積の時期であったと云える。大人の仲間入りをしての10年間であり、云わば第二期目の青春時代とも云える。70年のハワイは私にとっての二度目の渡布だった。70年はジャンボ・ジェット機就航した年でもあり、この年から大量にハワイへ日本からの観光客が運ばれるようになり、合わせて日本資本により、ワイキキの景観が一変してゆくことになるはじまりの年でもあった。

日本がバブルに浮かれはじめるようになってゆく背景には60年代後半に起きたベトナム戦争でのアメリカの大きな挫折感があった。ハワイのビーチのいたるところにヒッピーたちが住みつき、ハワイの若者たちもまたアメリカ本土で夢みたサクセス・ストーリーへの挫折感でハワイに再び舞い戻っていた頃だった。

ワイキキで観光ビジネスだけが增々ヒート・アップしてゆくだけで、若者たちの空虛さを満たしてくれるものは無かった。

こうした中で登場してきたのがギャビー・パヒヌイだった。私がギャビーと会ったのはそれから5年後のことなのだが、私もこの時期ハワイにいたのだから、私もこの時期ハワイにいたのだから、若者たちは自分自身を見つける為の何か切っ掛けのようなものが欲しかったように思う。その切っ掛けがギャビーだった。

ギャビーの魅力については語り尽くせないほどあるが、音楽性は元より、彼のライフ・スタイルに大きな共感を覚えた人は当時の若者の中で少なくないだろう。最後のハワイ人気質を持った人物と云われるように、天衣無縫でゆったりとマイ・ペースのライフ・スタイルを貫いた人だった。

この一見平凡なライフ・スタイルに若者たちが共感し、ギャビーのようなライフ・スタイルをする若者が増えていった。何を隠そう、私もそのライフ・スタイルに共感した一人で、今に私自身のスタイルが続いている。(パートタイム・ミュージシャン党 党首)

70年代に脚光を浴びたギャビーは1980年に亡くなるまでの間、70年代のハワイ音楽を席卷し続けたと云ってよいだろう。いや、今でもギャビーはハワイ音楽を席卷し続けている、と云っていいだろう。そこが、カリスマたる所以でもある。

本誌での紹介はギャビーが70年代に生み出したサンズ・オブ・ギャビーやその仲間たち、そしてギャビーに大きくインスパイアされたミュージシャンたちを中心に取上げたもので、勿論これがすべてではなく、一つの広がりにはすぎない。

そこでざっとではあるがギャビーを中心とした70年代のハワイ音楽を追ってみることとする。

70年に入ってのギャビーは永年活動の中心においていた古巣のサンズ・オブ・ハワイとの最後のアルバム『サンズ・オブ・ハワイ』を収録した後、続いてソロ・アルバムの収録に臨んだが、このアルバムが後に10年間の彼のサウンドを決定づけることになる。そのアルバムとはセビア・カラーのジャケットに大映しにされたギャビーの顔がある、印象的なジャケットのアルバム『ギャビー』である。このジャケット自体も当時としては画期的なもので、それまではハワイアン・アルバムと云えば、海の方に目を向けたもの、或いは観光地を意識したものが主流だっただけに、私自身、このジャケットをホノルルのレコード店でまだ発売前のジャケットを見た時には、私自身の体がゾクゾクと身震いしたのを覚えている。

画期的なジャケットの期待感を裏切ることなく、内容も十分に素晴らしいものであり、リリースされるや、すぐに大反響を呼び、大ヒット。ギャビーを中心としたスラック・キー・ギター・サウンドがここからスタートを切ったのである。この後のギャビーのアルバムに関してはギャビーのコーナーを見ていただければわかる。

ベンチャーズやビートルズなど彼らにインスパイアされたバンドが続々出て来た現象と同じように、ギャビーの後も同じような現象が見られた。一番身近なところではギャビーの息子たち、ブラ、シリル、マーティンのパヒヌイ・ブラザーズの3人であり、彼ら3人も共演しているピーター・ムーンも準息子と云えるだろう。ピーターはギャビー亡き後の80年代のハワイ音楽のリーダー格となったミュージシャンの一人だ。

ギャビーの親友たちも見逃すことが出来ない。アック・アイザックス、サニー・チリングワース、ジョー・ギャング等、ギャビー・バンドの中核をなすミュージシャンたちだ。

これに続くミュージシャンやバンドも続々登場してくる。主なものとしては、マカハ・サンズ・オブ・ニイハウ、オロマナ、サン

デー・マノア、ファイ・オハナ、そしてウエスト・コース系の影響を受けたセシリオ・アンド・カボノ、カラバナ等...列挙に暇がないほどだが、一部は本誌を見ていただければその一端がおわかりになるだろう。

最後にこの企画を立てられたKamani Hikalakawa氏に感謝すると共に、70年代に起きたギャビーを中心としたハワイのスラック・キー・サウンドは永い時を経て、ようやくこれから日本でもスラック・キー・ギターへの関心度、ハワイ音楽への関心度が高まりつつあり、芽生えはじめてきている。

日本でも同じように登場してくるだろう未来のミュージシャンたちへ本誌が一つの切っ掛けとなってくれることを望む。

スラック・キー・ギターの仲間たちは心地よい速さで確実に日本でも増殖している。スラック・キー・ギターの夜明けはもうすでに訪れているのかもしれない。私の身の周りを見ている限りは...

Best Aloha!
& Mahalo Pono
Alani

